

学校・地域が連携する家庭教育支援の考察(2)

栗原 保

(文教大学教育研究所客員研究員)

Study on Support of Home Education Based on Cooperation between Schools and the Community (2)

KURIBARA TAMOTSU

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

1 はじめに

(1) 親を取り巻く状況

家庭の教育力の低下、教育のできない親、親の子育ての放棄など、家庭教育がわれわれの社会の一つの大きな課題になっている。家庭の状況をみても、子育てに悩む親、子どもに対して無関心・無責任の親、放任・虐待など精神的に不安定な親、地域（近所の人々）とかかわることができず孤立する家庭等も年々増えてきている指摘も多い。これらのことが起因となるであろう様々な問題が学校現場でも起きている。中でも、「小1プロブレム」や「中1ギャップ」と言われる、入学当初から席について静かに話が聞けない子ども、友だちと一緒に遊べない子どもなどが増加している現状はその典型とも言える。しかし、20年前と比較して、親の半数以上が、親になる前の育児経験をもたないことや核家族化によって子育てや家庭教育についての話し相手をもっていない親が増加している状況もある。ただ親だけにしっかりしろというだけでは様々な問題に対応できない状況であり、学校をはじめ地域社会としてどのように家庭教育への支援を行うかは緊要の課題となっている。

(2) 行政による家庭教育支援の動向

教育基本法や社会教育法の改正において、学校、家庭、地域住民等の連携、協力の促進に努めることが明記され、家庭教育支援の内

容のさらなる充実が求められている。改正社会教育法の第5条第7項では、市町村の教育委員会では、「家庭教育に関する学習の機会を提供するための講座の開設及び集会の開催並びに家庭教育に関する情報の提供並びにこれらの奨励に関すること」とし、社会教育行政の重要な事項の一つとして、「家庭教育講座」、「家庭教育相談会」など家庭教育の充実に資する事業の開催が新たに義務付けられた。平成23年度家庭教育支援の国の重点施策として5点が挙げられる中で、「家庭・学校・地域の連携による家庭教育支援の取組み」が述べられている。様々な市民や団体・学校・関係機関など社会全体での協働の取組みが求められている。

(3) 埼玉県教育委員会の取組み（「親の学習」プログラム集の活用）

埼玉県では、家庭の教育力の向上を図るため、平成19年度に『「親の学習」プログラム集』、平成25年度に増補版を作成し広く活用している¹⁾。また、「親の学習」の指導者で地域の子育て活動の支援者である「埼玉県家庭教育アドバイザー（以下、「アドバイザー」と表記する）」²⁾を養成している。平成25年3月現在、903名の方が登録され、市町村と共に連携を図りながら地域で活動をしている。このプログラムは、子育て中の親等を対象とした子育てに必要な知識やスキルを学ぶこと

ができる「親が親として育ち、力をつけるための学習」と、近い将来親になる中学生・高校生を対象として子育て等の理解を図る「親になるための学習」³⁾がある。「親が親として育ち、力をつけるための学習（主として子育て中の親を対象）」では、就学時健康診断や入学説明会、家庭教育学級や学級懇談会などの機会に活用され、23年度の実施回数は923回、44,000人を上回る参加があった⁴⁾。また、「親になるための学習」の学校での指導は、中学校の技術・家庭科、高等学校の家庭科の教員で、24年度の中学校家庭科の授業で「親の学習」プログラムを活用した学校は同調査で50.2%（183校）、さらに中学校で家庭教育アドバイザーを活用したのは14.0%（51校）、技術・家庭科の授業等での活用となると2.7%（10校）となっている。

(4) 学習指導要領の改訂と家庭教育支援

文部科学省は、平成20年3月に学習指導要領を改定し、中学校では平成24年4月から全面实施をした。中学校3年間の中学校技術・家庭科の家庭分野の時間数は、中学校1・2年生が各35時間、中学校3年生が17.5時間の配当となっている。領域は、4つで、A「家族・家庭と子どもの成長」、B「食生活と自立」、C「衣生活・住生活と自立」、D「身近な消費生活と環境」である。Aの領域では5つの目標をあげ、中学校1年と3年で取り上げる内容で、1「わたしの成長と家族」、2「わたしたちと家族・家族と地域」、3「幼児の生活と遊び」、4「幼児とのふれあい」、5「これからのわたしと家族」となっている。今回の改訂では、「幼児との触れ合い体験」が必修化された。この背景には体験活動の重要性の指摘がある。

2 研究の目的・内容

(1) 研究の目的と内容

中学校が実施する技術・家庭科等の授業に埼玉県の「親の学習」プログラム等をどう位

置づけ、教員とアドバイザーが協働して授業に取り組む（TT授業）意義を検証する。この一連の学習活動に、保護者も参観・参加するなどして、学校・地域が連携して家庭教育支援モデル（以下、「モデル事業」と表記する）」を構想し、実施後その成果や課題を把握する実証的な研究とする。

研究の内容は次の4点とする。①「親の学習」を活かした学習内容・プログラムの開発、②教員とアドバイザーのTTによる指導方法の工夫、③親も一緒になって学ぶ環境づくり、④実践したことによる生徒や保護者、教員、アドバイザーにとっての成果・課題の把握。

(2) 実施した中学校での諸準備

今回協働で実施した中学校は、埼玉県内のA町立C中学校（25年度）とB市立D中学校（27年度）である。実施する学校を選定するために事前の情報提供を多くの県内の中学校管理職等に対して筆者とアドバイザー（コーディネーター役）で行った。A町（小規模）は人口1万2千人で町内には中学校が1校、B市（中規模）は人口13万7千人で市内には8校の中学校がある。対象の中学生は、A町立C中学校の第3学年（4クラス118名）とB市立D中学校第3学年（2クラス83名）である。例えば、C中学校では、前年度の11月から管理職・教科担当者・学年主任・PTA役員等と打ち合わせを行い、新年度の4月に改めて打ち合わせをスタートさせ、9月実施の計画を双方で積み重ねていった。また、A町教育委員会と調整を図りC中学校が主体的に取り組める環境づくりを構築していった。筆者は後方支援を原則に構想・準備・ふりかえりの段階を主とし、事前のアドバイザー（TT担当）との打ち合わせや学校関係者との合同の話し合いに関わった。また、家庭でのコミュニケーション機会の向上の手立てとして生徒の学習内容と共に保護者の学習機会になることを目的にPTA関係者等とも情報交換を行った。

(3) モデル事業の概要

C中学校とD中学校の3年生の実態や家庭環境は、学校規模の違いや都市化の違いはあっても類似点が多い。例えば、管理職へのインタビューでは、ひとり親家庭の占める割合が全家庭数の2割前後ということや家庭科の授業の教育課程の扱いでは、両校とも家庭科領域の学びで「家族・家庭と子どもの成長」の分野の授業は1年生と3年生で学ぶ。1年生の5時間（「わたしの成長と家族（2時間扱い）」「わたしたちと家族・家族と地域（3時間）」）では、自分史を書かせ、生まれた時の事、自分の名前の由来などを調べさせている。その土台の上に、3年生では17.5時間（「これからのわたしと家族（3.5時間）」「幼児の生活と遊び（8時間）」「幼児とのふれ合い（6時間）」）となっている。後半の保育園に行く体験授業以外の前半の授業では3.5時間扱いであることから、総合的な学習の時間や特別活動との関連をつけ充実した取組みの可能性が考えられた。

C中学校では、4クラスにアドバイザー各1名の4名とアドバイザーを統括するコーディネーター役のアドバイザーと筆者が関わった。9月初旬に技術・家庭科の家庭分野のオリエンテーション授業がもたれた。生徒は、テーマ（「親になるって？」）の提示や中学生の家庭教育観調査の記入、アドバイザーとは、アドバイザーへの質問事項等を学んだ。9月下旬、各クラスにアドバイザーが参加し第1回目のTT授業を行った。内容は、埼玉県「親の学習」プログラム1－(4)「親になるって？－ロールプレイング－」を素材にして、自分が親としての役割を演じながら具体的な親の立場や子供との関わりなどを体験的に考えた。授業後、宿題として「親へのインタビュー調査」⁹⁾を各自に課し、次回の授業前までに提出を求めた。10月中旬、第2回の授業として、宿題の調査のまとめの発表・話し合いから、親になることのイメージをひろげ、「自

分が理想とする親像」を考えた。それらをグループ内でまとめ、クラス全体で「将来、こんな親になるとよい子が育つ」ベスト5として集約した。そして、11月初旬、アドバイザー・親も参加したまとめの学年集会（50分授業）が開催された。内容は、クラス毎の親像（5～7項目）の発表、生徒同士の意見交換、アドバイザーからのアドバイス、保護者からの感想発表などを行い、生徒代表2名が一連の学びをまとめた。保護者にあっては、各クラスの技術・家庭科の授業や学年集会に参観・参加したり、「親の役割」⁹⁾調査協力という形とした。調査は、PTA会長と学校長の連名で、第3学年保護者対象に「思春期の子供を持つ親の役割調査（A4 1枚裏表10月初旬案内）」を依頼し、とりまとめ後PTA本部と学校で活用を図った。

D中学校では2クラスにアドバイザー各1名の2名とアドバイザーを統括するコーディネーター役のアドバイザー2名と筆者が関わった。C中学校より授業を1回増やし、5月から7月の時期に4回、まとめの学年集会は2時間続きとした。また、1学期末の保護者対象の懇談会（2クラスで31名の参加）にアドバイザーを招いての「親の学習」を実施した。

3 実践活動

(1) 実践1（埼玉県の「親の学習」を活かした学習内容・プログラムの開発）

C中学校の第1回の内容は、埼玉県の「親の学習」プログラム1－(4)「親になるって？－ロールプレイング－」を素材にして、自分が幼児期の子をもつ親としての役割を演じながら具体的な親の立場や子供との関わりなど学ぶ体験活動を行った。教師が全体をリードしアドバイザーが生徒の発表に具体例を紹介した。次回につなげる宿題として「親へのインタビュー調査」を各自に課し、次回の授業前までに提出を求め、事前に教師がまとめを作成提示する準備を行った。第2回の授業

として、宿題の調査のまとめの発表・話し合いから、親になることのイメージをひろげ、「自分が理想とする親像」を考えた。アドバイザーは各グループに積極的に入り、「将来、こんな親になるとよい子が育つ」ベスト5の集約に関わった⁷⁾。共通して上げられたものが、「時にやさしく時に厳しく」、「子供のことを考えてくれる」、「常識を教える」、「立派な見本」、「頼りになる」等で子どもを援助する姿勢や具体的な行動を起こすことをモデル・存在として関連した親像といえる。

D中学校の第1回目からTT授業を行い、「幼児の成長から自分の成長を見つめよう」というテーマを設定、0歳から5歳までの乳幼児の特徴（運動機能、心・ことば、生活習慣）について調べ学習を行った。その後、親や周囲の人と関わり合いをグループで話し合い、アドバイザーの体験を聞き、自分と家族の関わりについて考えた。第2回は、C中学校同様、1-(4)を使ってロールプレイングを行った。授業後、宿題として「親へのインタビュー調査」を各自に課し次回への継続性を意識させた。3回・4回はアドバイザーが、35分のワークを中心に担った。ワークのテーマは、3回目が「おうちの人にしてもらって嬉しかったことは」、4回目が「自分が将来親になったら、中学生の我が子にどんなことをしてあげたいか」を取り上げ、テーマである「親になるって？」に個人とグループ活動から迫っていった。まとめの学年集会では、生徒・3学年教師・アドバイザー・保護者（12名）が体育館にあつまり、2時間続きの学習を行った。家庭科の授業、総合的な学習の時間、特別活動の3部構成とし、教師の指導授業、アドバイザーによる小グループによるワーク、生徒が進める学年集会（各発表や5回をふりかえりまとめる）とした。また、保護者でグループをつくり「我が子の将来に向けてしてあげたい事」について考えを出し合った。

(2) 実践2（教員とアドバイザーのTTによ

る指導方法の工夫)

学校で行われるTT授業では授業者と外部者との意思疎通が欠ける問題点がしばしば指摘される。例えば、小学校のALTとの英語の授業で2人のバランスがよくない例がある、ALTが主導のようになり教師が（英語について分からないのもあり）引込み過ぎてしまう例は典型である。今回は、アドバイザーのコーディネート役と教員が先ず話し合い授業構想をイメージする機会をもった。その後教員とアドバイザー（クラスを担当する）で指導方法を含めた打ち合わせを進める。教科担当教諭がねらいや達成目標を明確にした打ち合わせでアドバイザーのもつ経験・想いを活かすように相談していった。子どもの本音である、「親に言いたいことがあっても口には出せない。」、「自分でもわかっているが、でも言葉や行動が伴わないジレンマ。」といったアドバイザー側からの指摘で教師が気づかない点も検討し盛り込んだ。グループの構成や宿題のまとめ方と提示方法、発問の工夫、各生徒の理解度等細部にわたっての共通認識がもてた。それによって、アドバイザーがゲスト的な扱いではなく積極的に生徒の中に入っていくことができた。

(3) 実践3（親も一緒になって学ぶ環境づくり)

両校の実践とも準備の段階から、管理職・PTA会長や役員との話し合いを進めることで学校とPTA・保護者との連携協力の土台作りをした。それによって、①授業を積極的に公開することで保護者の参観ができる、②まとめの学年集会に保護者の参観・参加する場をつくる、ことを確認できた。そうした組織との関わりの中から保護者への意欲を喚起していった。

C中学校では、PTA活動の2学期の各種行事・活動（保護者会・進路説明会・バスでの進路学習会）で生徒の「親の学習」の取り組みの情報共有の機会がもたれた。また、「思

春期の子供を持つ親の役割調査」のアンケート調査を行い保護者の意識を調査し、とりまとめを行い、PTA本部と学校に報告を行い独自の研修に結びつけた。

D中学校では、一連の授業などが終了した1学期末の学級懇談会に、授業に参加したアドバイザーがファシリテーターとして参加し生徒の変容にふれながら家庭での活かし方について学んだ。

(4) 実践4 (生徒や保護者、教員、アドバイザーの成果・課題の把握)

ア 生徒の感想・変容

C中学校の生徒の感想は、「親になるのは難しいと思った。」「家事や経済も大事と思った。」「親にもっと感謝しなければいけないと感じた。」「自分が親になったら今の両親のようになって自分の子供から感謝されたい。」「自分は、自分の親が理想で子供のことを一番に考えてくれている。今度は嫌がらずに親を介護していきたい。」等があった。

D中学校の生徒の授業評価⁸⁾を分類すると、「親への感謝」、「親になる学習は大事」、「自分が親として成長していく心構えをもつ」、「赤ちゃんへの接し方には注意が必要」の順に記述が多かった。男女の違いでは、女子では「親への感謝」の記述に集中しているが、男子は外部から家族を守る事や社会とのつながりなど幅広い記述や真剣に自分の内面に向き合おうとする記述もあった。「自分にもハイハイをしたり泣きじゃくったり、『ブーブー』や『マンマ』などと言っていた時期があったんだな。」「自分は今のところ親になりたいとか結婚したいという思いはないが、自分は車が好きなのでいつか自分の子どもとドライブに行きたいかと思うようにもなった。いつか親になったときのためにこのことは忘れないようにしたい。」などである。

さらに具体的な記述をいくつか取り上げると、『親への感謝』では、「私がここまで大きく、危険もなく成長できたのはこれまでの家

族のおかげだ。決して楽じゃなかったと思います。だから家族に感謝したい。」「親の大変さを知ることができたので今まではたまにしかやっていたいなかったお手伝いもこれからはもう少し増やしたい。」「『親になる学習は大事』では、「アドバイザーの実例を聞いて、今の自分にはまだまだ足りないことが良くわかった。」「正直親になるための学習は『つまらなそうだな』『役に立たなそうだな』と思った。でも、実際に学習してみると授業はとても楽しく将来役に立ちそうなことばかりだった。」「『心構えをもつ』では、「親になるには色々な知識を理解した上で世話をできなければならないと思った。子どもの気持ちを考えて今どうすればいいか等色々大変です。でもこのような学習はなかなか無いチャンスなのかもしれません。」「『赤ちゃんへの接し方』では、「私は親になるための学習を行って初めて知ったことで、小さい時でも親の言っている事が聞こえていることでした。」。

イ 保護者の反応・感想

両校の保護者とも学校のこうした取り組みについて、「家庭科の授業の内容に家族との関係や将来親となる学びの機会があることをはじめて知った。」「学校と一緒にこうなろうとした学びの機会を大事にしたい。」など驚きを実感していたのは共通していた。子ども達に向けての感想では、C中学校の保護者は、第1回目のロールプレイング学習で、「子どものいいなりの親」を演じなかったのは少し安心した。」「子どもにとって理想的な親の発表では、「授業も何回か見学し子ども達が自分たちでここまで立派な意見をまとめたことに驚いている。」「最初は自分達に都合のいい意見が多く出ていたが『しっかりしつけてくれる親』、『厳しく叱ってくれる親』など成人の気持ちに立つ心の変化が現れてきて頼もしく感じた。」「D中学校の保護者では、「伸び伸びと楽しそうに参加しているし、色々な家庭環境があることも感じていたようだっ

た。」「悲しいことにさめた態度の男子もいたが、照れながらも考えていたようで、男子には思春期の特徴が表れているのかと納得できた。」

現役の親自身としての学びとして、C中学校では、「子育てはまだまだ終わりでなく今後も続いていく。自分自身のことにも照らし合わせこれらを教訓として子育てを続けていこうと思った。」「私も子育ての正解も不正解も分からないが向き合って一人の人間同士として共に向き合って考えていく。」「親は子どもを育てながら親になり人として成長していきける。」「家庭での親の力のなさを露呈しているのかもしれない。だから親の学ぶ機会は重要でPTAで取組むことではないか。」。D中学校では、「小学校と違い集会では生徒と関わることがとてもよかった。」「授業で話題になっていた親の態度によって子どもの性格が変わるという資料には今さらながら参考になった。」「『嬉しかった事は毎日話しかけてくれる事』という子どもの本音を聞きこれを家庭でも生かしてみようつもりだ。」「我が家であたり前の事が他の家庭では違う価値観もあったことは新鮮だった。」等だった。

ウ 教師の感想・変容

C中学校の教科担当者は、「アドバイザーとのTT授業について生徒にとって違和感がなく第1回目から生徒はリラックスしていた。自由に発言し許容される雰囲気をつくりあげることができてよかった。改めて3年生の時期になると、客観的な見方ができる年頃だということを感じた。」また、「アドバイザーはいろいろな引き出しをもっていて体験に基づく具体例の話が貴重で、生徒が多様な見方ができる授業となった。」「以前の授業で教師のみで進めていると、先生からの発言は家での親の考えと同じで、家でも学校でもうるさい母親が二人いるようで窮屈になるというつぶやきを思い出した。そんな本音が垣間見ら

れたことは、体験豊富なアドバイザーが授業に関わることで大きな成果となったのではないか。」「若い教員（未婚で子どももいない）にとっては、特にアドバイザーの参加・参画は重要と感じた。」といったものだった。

D中学校の教師の感想では、「打ち合わせは確かに大変だったがこれまでの授業と比較して色々な方から生徒が指導を受けることで子供にとって多様な判断基準が生まれた。」とした。「2学期の保育の学びに生かせる内容も多かった。例えば、幼児目線でみる学び。お腹にいる頃のことや子どもが物を壊した時の対処の仕方などはびっくりとなった。」。そして「何よりも自立につながる自覚をもったことである。幼児への目線が大人の見方もできるようになった。自分一人ではないことや自分の行動に責任を持ち冷静な見方もするようになったと捉えられる。中学校1年生では他人事であったものが中3となって考え方がしっかりしてきた段階を考えると3年生の時期に学ぶ意義がある。」「アドバイザーは学校側の求めに全面的に受け止めていただいた。何よりも子どもの立場を尊重して接してくれた。はじめは4回の全日程をあわせるのは難しいのではと思っていたし、子ども目線に合わせてくれるプログラムの提供はありがたかった。そして小・中学校のPTA役員の経験をもったアドバイザーだからよかった面もある。幼児を対象とする専門のアドバイザーであればまた違っていただかもしれない。」などであった。

一方課題としては、「この単元のねらいとしては4つの柱があり、「親になる」だけの目標では弱いところがある。幼児の成長、栄養・離乳食のこと、幼児と家族、地域、お年寄りとの関係について広げられればさらに良かった」。1単位時間の到達目標を達成するには教師がどうしても待てずに解説したりして説論的になる傾向もないわけではなかった。そうした点から授業と総合的な学習の時間の

使い分けを検討する余地がある。』。まとめの集会（家庭科授業＋総合的な学習の時間＋学年集会）では、「学年集会を進路指導につなげるなら、3学年職員との打ち合わせをしてもっと厚みのあるものにできたかもしれない。それであれば今回の場合は学年集会を切り離して2部構成でもよかったかもしれない。』。また、「アドバイザーが女性ということで、母親目線に終始してしまった面も少なくなく父親の考え方をもう少し伝達する場面もあると男子の内面に入り込めたかもしれない。』。

エ アドバイザーの感想・変容

両校のアドバイザーとも、1回限りのゲストではなく継続して教師とのTT授業での関わりは初めてだったので、ファシリテートとアドバイスの違いをつかむのは苦労したようだった。期待と不安が交錯する中で、最後は、「真剣に取り組んでくれ、生徒達が変わっていくのを見て取れて嬉しかった。生徒を介してお互いに勉強になった。」という感想があった。また、「将来親となる中学生に対して、大人になってからの子育て時に思い出してほしいし、これから周りの大人の接し方を見ることにより人に関心を持って社会性を身につけてもらえれば。」と期待の言葉もあった。

先生方とのTT授業の進行では、C中学校のアドバイザーからは、「教師の毎回の授業がいろいろな視点が盛り込まれ準備が工夫されていてステップアップを感じた。」「体験だけを話し伝えるだけのアドバイザーの力量では子どもたちに真の理解にはつながらない。教師の授業力はすごいと感じた。」とした。

親にあっては、「こうした学びの機会に参加することで、これまでの自分の子育てを振り返ることができる利点がある。これからの子育てで我が子を大人にしていくために世間や社会への対応の仕方を伝えることの大切さに気づいたのではないか。」「親だけの親の学習と違って子どもが学ぶ姿からいろいろ考え、共に学ぶ実感がジーンときた場面もあつ

たと思う。」「離婚し実家に帰ってきているシングルマザーの若いママが多くなっているのはこの地域も同じで、何とかアドバイザーとして支援をしなくちゃという実感がある。だから学校と協力しながら親へ心構えを伝えていくことはアドバイザーの役目だ。」などがあつた。

6 調査からの考察

(1) 多感な中学3年生だからこそTT授業は有効

埼玉県の「親の学習プログラム」は「ワークを取り入れる参加型の学習」という特徴を持っている。これまでのプリント中心の学習では具体的なイメージが持てない中で細かいステップの連続でコマ切りとなっていたが、オープンな課題を投げかけ、ワークをしていく利点が今回活かされることで、生徒が主体的に学ぶ場面を多く引き出すことになった。「親になるって?」という一連のテーマは、思春期の青年にとっては日常の中の非日常な問いと感じた。自分の親にインタビューする家庭でのやり取りと合わせて「親になるための学習」を前半から進めるプログラムとなった。ある女子は、「もし、私が親になったら・・・」というロールプレイングは深く考えさせられた。」とした。当初から、女子の意欲的な取組みが見られたが、男子は徐々にということにならざるを得なかった。女子が子育てを身近に捉へ意欲的に学んでいくのに対して男子は「子育て」「親の役割」など漠然としか捉えていない。しかし、後半になって、「これからの未来の自分の大事な学習として先生を招いて話を聞き子どもの頃（赤ちゃんが小さい時）の話を聞いていくうちに、『うわー、めっちゃくちゃ大変なのか』との言葉や『早く聞いておいて良かったな、これでも子どもができたらず少しは落ち着いてできるかな（多分無理だが）』と男子の生徒のつぶやきが授業の中で連鎖の場面があつた。

また、学校での学びを家庭での話題とし親とのコミュニケーションにつなげた感想もあった。「常に優しくするのではなく、時に厳しく時には優しく自分の子だからこそ大切に育てる。過保護になってはいけないことを学び、父に聞いたらそうだよと言われました。パパとママも過保護になり過ぎないように育てようと私が生まれた時そう話し合ったそうです。なんかそんなことを聞いたら感動しました。」という男子。「もっとたくさん子どもの成長について学びたいと思った。中1の時に助産師さんになりたいなって思っていてそういう関係の仕事につけたらいいなと親と話しができました。」という女子もいた。

教科担当者・アドバイザー・保護者から思春期前期の段階の貴重な学びにつながったことが指摘された一連の授業が展開できたことが示された。

最後の学年集会をもちクラスを越え学年としてのまとめを行ったことは有意義であったが、保護者も同席している中では、「子どもの言い分」「親の言い分」というディスカッション形式に発展できる可能性もあつたのではなかつたか。

(2) 保護者の主体的な学びにつながつたのか

保護者に第1回の授業参観後インタビューすると、「親にすれば子どもが何を考えているかわからない思春期前期という悩みがある。」「進路選択の時期に家庭でのコミュニケーションが大事ということはわかっていても、親としてはすぐ結論を急ぎ過ぎる傾向があつて子どもとうまく会話できない場面もある。」という切実な話しがでた。「子どもたちの授業を真ん中に主体的に参加することで、親同士の意見交換につながった学びはこれまでなかつたし、そして何よりも子どもの変容が見えたことは大きな成果だつた。」との指摘は貴重である。それが、教師・学校から提供されたことで学校へのさらなる信頼感につながるこ

とになる。また、C中学校では「親の役割アンケート」を実施活用したり、D中学校では、1学期末の学級懇談と結びつけたりする工夫に発展させた独自の取り組みとなつたことも評価できる。

保護者の参加は、C中学校では実人数9名・延べ人数23名、D中学校、実人数19名・延べ人数26名で、どちらもPTA役員を中心とした参加に限られてしまった。共働き家庭が多くなっている状況や3年生の時期には学校への召集が他にもあることで、学校長とPTA会長の連名による文書だけではイメージがわからずに意義を伝達すまでにはいかなかつた。学年便りや学級通信、PTAだよりなど多様な情報発信の必要性がある。

(3) 授業担当者・学校と保護者・PTAをつなぐコーディネートの強化がさらに必要

C中学校の校長から「今回の取組は、10年20年後に個人として成果を出す授業だつた。子どもたちは今後も地域での生活と密接につながっていくのだから、アドバイザーの方々との関わりは大きかつた。学校は忙しさから地域の力を取り入れコーディネートする力が弱いところもあり、今回の支援は学校としてありがたかつた。」。また、「教職員にとつても地域や外部の力が入ることはとても刺激になる。」と外部からの働きかけについての評価があつた。

一方、参加した保護者個人にとつてはいいきっかけとなつたが、PTAという組織的な活動への浸透までにはいかなかつた。社会教育分野の任意団体を支援し変容するにはさらに時間をかける必要があるということだ。D中学校の教頭にインタビューをしたとき、PTA役員は2年もすると役員交代があり、主催事業も前年度踏襲型とならざるを得ない。だから新しい形を定着するには3年以上はかけていかないと達成できないと実感すると答えている。PTA活動の中に核となる人材をみつけることや担当する組織をつくる働きかけ

ができないとどうしても主体的な動きに発展していかない。今回丁寧な事前の準備を心がけたつもりであるが、現役の親世代の学びの充実を図るには、前段の内容が改善のポイントとなる。コーディネート機能として、学校・教職員との協力関係や社会教育分野のPTAへと両面からの働きかけが重要となる。

7 終わりに

この実践をする前に多くの学校関係者との意見交換を心がけた。例えば、家庭科の教科担当でアドバイザーのことを知っていたのは2割弱であったり、3年生の教育課程で保育園や幼稚園での体験活動が中心となりかなり時間が必要であること。そのために、前半や後半の学びや振り返りを深めていくには時間がかけられない。それでも「生の声」を生かす工夫もしたいし、「親の学習」のアドバイザーの協力も得たいが、どんな方がどんな関わり方をしていただけるかもわからないと一歩踏み出すことができないでいる。そうしたインタビュー調査から構想につなげていった。

今回、公立学校が将来親になる中学生とその保護者の家庭教育を支援するというモデル事業を実践し検証した。そのモデルは、技術・家庭科の授業と総合的な学習の時間などを活用して総合的に全体計画に位置づけ、地域で活躍する家庭教育アドバイザーやPTA役員とも協働していくものだ。いわば学校教育関係者と社会教育関係者が家庭教育を支援し連携協力する仕組みを模索していくことは、生徒自身や親の声から現時点で有意義である可能性があることがわかった。地域の教育力の人材のもつ力や特性を生かすことは、学校・家庭・地域の具体的な関わり方がわかったことで、地域の教育力の向上に向けた一歩となったと考えられる。実際には、中学生が成長し結婚や子育てに入った時点で本当の成果は表れることになる点は否めないとしてもその効

果は大きいと考えられる。

地域の人材で資質を持つアドバイザーやコーディネーターの養成も課題の一つであることから、引き続き、自分自身がコーディネーターとして関わり継続した研究としていきたい。

(注)

- 1) 「親の学習プログラム集」は5領域(対象別)20のプログラムから構成されている。5つの領域とは、「すべての保護者(5プログラム)」、「乳幼児をもつ保護者(5プログラム)」、「小学生をもつ保護者(5プログラム)」、「中学生・高校生をもつ保護者(5プログラム)」を対象としたプログラムと近い将来親となる「中学生・高校生(5プログラム)」となっている。そして、このプログラム集作成から5年が経過した平成25年度に、『「親の学習」プログラム集増補版』として、現行プログラム集の最新データを更新した資料を掲載するとともに、中学校生活への不適応や携帯電話によるトラブルなど子供たちを取り巻く多様な問題に対応した14のプログラムを新たに追加した。「親の学習」プログラムの特徴は、取り組み易さを重視したり、望ましい子育てのあり方の入門的な内容を多く取り入れ、ファシリテーター(学習支援者)をリーダーとした「参加型学習」となっている。
- 2) 埼玉県教育委員会が1998年から「子育てアドバイザー」養成を開始し、2009年より、「家庭教育アドバイザー」と名称を変更し、8日間の研修により修了生を認定している。これまで約1,200名を養成しており名簿の登録は任意となっている。「家庭教育アドバイザー」の役割は、「子育てに関する不安や悩みをもつ親などに対してアドバイスや相談活動を行う『子育てアドバイザー』と親が親と

して育ち、力をつけるための学習『親の学習指導者』の双方の活動を行うことができる。市町村や学校などで行われている家庭教育学級や親の学習講座における良きアドバイザーとして支援している。

- 3) 「親になるための学習（近い将来親になる中学生・高校生を対象）」には、増補版を含め6つのプログラム（中学生対象が2本、高校生対象3本、中・高校生対象1本）がある。中学生では、「家族って何だろう?」「幼児を知ろう」、高校生では「お母さんになるってどんな感じ?～妊婦体験をしてみよう～」「子どもを育てるって?～ロールプレイをしてみましよう～」「幼児とふれあう～保育体験をしてみましよう～」。中・高生対象では、「親の思い・子の思い」となっている。
- 4) 埼玉県教育局市町村支援部家庭地域連携課調べ 平成24年3月
- 5) 「親へのインタビュー調査」の内容として、「家庭とは」、「自分が生まれた当時、どんな思いをもったか」、「親の役割」、「父親と母親の役割の違い」などについて聞ける範囲でインタビューする宿題。
- 6) 「親の役割」とは、遠藤克弥編著『地域教育論～生涯学習から社会教育へ～』川島書店、2011年3月 P88～「保護する存在としての役割」、「援助する存在としての役割」、「社会的な存在としての役割」、「行動モデルとしての役割」、「共に学ぶ存在としての役割」の5つがある。

- 7) クラス毎の親像は次の通り。(1組) 子供の気持ちを考えてくれる親、頼れる親、礼儀正しく常識のある親、時に優しく時に厳しく、立派な見本になる親、家事や仕事をしっかりやる、健康的な親。(2組) 頼れる親、怒る時は怒り褒めるときは褒める親、話を聞いてくれる親、愛情のある親、常識のある親。(3組) 優しく明るい親、しっかりと向き合ってあげる、しっかりしていて頼りになる親、尊敬できる親、良い家庭環境をつくる、時に優しく厳しい親、いろいろなことを教え子供の手本となる親。(4組) 愛情をもった親、子供のしつけがしっかりできる親、子供の見本になれる親、子供の事を考えてくれる親、家族を養える親。
- 8) D中学校の生徒の授業評価では、「親になるための学習を行って考えたこと」は総数52名から回答を得て内容別に6つに分類。多い順に、「親への感謝 (36%)」、「親になる学習は大事 (29%)」、「自分が親として成長していく心構え(20%)」、「赤ちゃんへの接し方には注意が必要 (19%)」、「自分の成長を思い出す(8%)」、「親目線から子どもを見られた (4%)」。

(参考資料)

- 1 『子どもたちの未来をはぐくむ家庭教育～家庭教育支援の取組について～ (リーフレット)』文部科学省生涯学習政策局、2011年